

尿管憩室の症例

京都大学医学部泌尿器科学教室

加藤 篤 二

山下 翕 世

DIVERTICULUM OF THE URETER: REPORT OF A CASE

Tokuji KATO and Akiyo YAMASHITA

From the Department of Urology, Faculty of Medicine, Kyoto University

A 16-year-old girl was admitted with flank pain and episode of frequent attacks of pyelonephritis. Urograms demonstrated a diverticulum of the left ureter. The diverticulum was surgically removed and measured 7.0 cm in length and 0.6 to 0.9 cm in width. Histologically it showed the structure of the normal ureter.

はじめに

腎盂腎炎の症状のため来院して偶然本症を発見され摘出手術をうけた尿管憩室の1症例を報告する。

症 例

患者：16才の女子 初診1971.11.22

主訴：腰痛

既往歴：4年前虫垂手術をうけたことがある。

現病歴：1971年4月高熱をきたし某病院へ入院の結果腎盂腎炎として治療をうけ軽快したが、そのご再三再発をきたし腰痛を訴え、本院で腎盂撮影の結果右尿管に奇形所見があることがわかり、本年3月13日手術のため本院泌尿器科に入院した。

術前所見：体格中等度，貧血なく，胸部に異常なく，腹部で右腎は1横指，左腎はふれず。膀胱部に圧痛なく，その他全身的の奇形はもちろんレ線像で本症以外の変化を欠く。尿は全く清澄で蛋白(-)，赤血球(-)，白血球(-)，円柱(-)，膀胱鏡検査で後壁に軽い発赤のあるほかに著変なし。血液像は赤血球 448×10^4 ，白血球6,200，ヘマトクリット35%，出血時間7分，凝固時間9分30秒，血圧140/100。レ線単純撮影で泌尿系に結石像なく，点滴静注排泄撮影で両腎排泄良好であるが，左尿管上部が分岐し外側は上行して盲端に終わっている。左側のみ逆行撮影をおこなうに分岐部の狭窄なく外側はやや太く上行して腎盂前面に棍棒状の盲端に終わっている (Fig. 1)。排泄撮影に

兼ねて選択的腎動脈撮影をおこなうもとくに異常所見はない (Fig. 2)。

手術所見：以上により左尿管憩室として3月24日摘出手術をおこなった。術式は左腰部斜切開で，左腎下極の位置で尿管を検索すると明らかに2本みられ，外側のもはやや太くこれを上方にたどるとちょうど腎門の前面で盲端に終りその上部は線維性結合組織に移行しており容易に剥離できた。尿管を下方にたどると臍位(L₅)でY字状に分岐するを認めた (Fig. 3)。よって分岐部より約1cm上方で外側尿管を切除した。摘出尿管は長さ7cm，幅0.6~0.9cmにおよんだ (Fig. 4)。摘出尿管は組織学的に尿管とほぼ同様の筋層構造を示し，粘膜はところどころ剥離欠損し，粘膜下に軽度炎症像がみられた。なお同患者は4月8日全治退院した。

む す び

尿管憩室は重複尿管と異なり，きわめてまれなしかも発生学的に興味のある奇形疾患であり，海外では古くRichardson (1942)は33例，Culp (1947)は52例を集めて報告しており，とくに後者はこれを7種類に分けている。このうちblind-ending bifid ureterの型がHerbut以来問題になっている。本型は不完全重複尿管のいずれかの一枝が発育を停止して腎まで到達せず途中で盲管に終ることが多く，このさい尿管の形態を保ち尿管に沿い上方に走向するもので，この型を球形ないし卵円形の憩室より分離せよという人も多いが一般には尿管外方にこれと連絡ある囊状物があれ

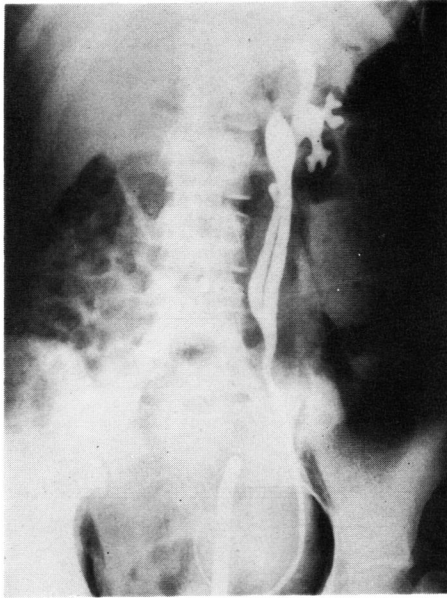


Fig. 1

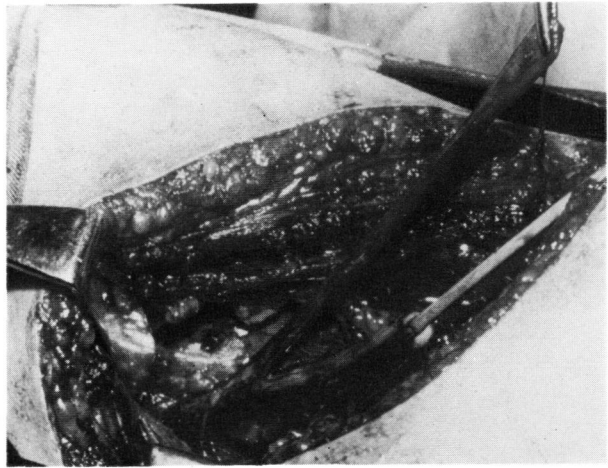


Fig. 3

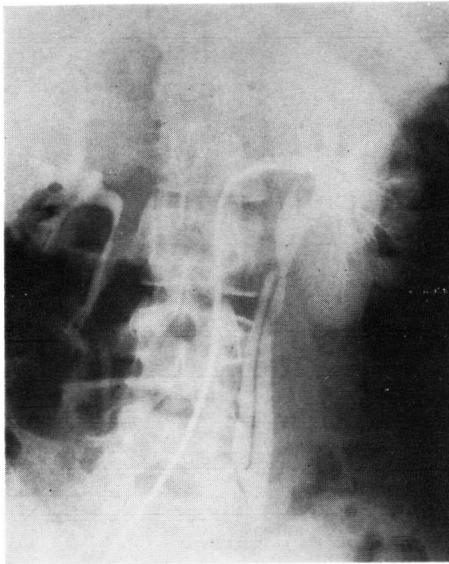


Fig. 2

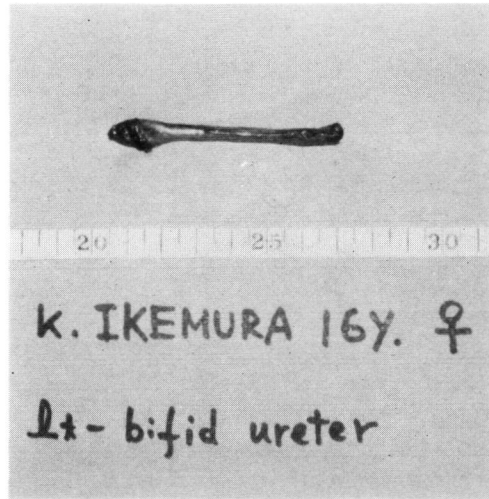


Fig. 4

ば広くすべて憩室と呼称されている。本邦では高橋・土屋の詳細な文献考察がなされ、両氏は原因により6型に分けており、なお土屋は日本泌尿器科全書に世界における多数の珍しい症例の図譜を掲載し、本邦の11例を検討している。当教室では多田・新谷の1例、友吉・久世らの1例につぐ第3例で、文献では尿管の内側に出るのが多いが、本例のごとく長さ大となるとともに外方へとおもむきやすく、かつ先端が拡張して棍棒状をなしているのが特異であった。

参 考 文 献

- 1) 岩下：体性，26：633，1939.
- 2) 高橋・土屋：皮泌誌，43：589，1938.
- 3) Richardson：J. Urol.，47：535，1942.
- 4) Culp：J. Urol.，58：309，1947.
- 5) 友吉・久世ら：泌尿紀要，7：994，1961.
- 6) 土屋：日泌全書，2，II，708，1961.

(1972年6月6日超特別掲載受付)